





るのだと私は思います。分野は違っても、研究者が日々の研究活動の中で味わう喜びや苦労は研究成果の背後に確かに存在しています。研究の現場を実際に経験したからこそ、多様な分野の内容をわかりやすく伝えるだけでなく、単なる解説にとどまらない奥行きや厚みを記事に与えることができるのではないのでしょうか。博士課程で磨いてきた科学的視点に基づく文章によって、科学を本質を損なうことなく、読者に明快に届けられる——その「伝え方」に、これまでの研究経験が生きていると私は感じています。

## 科学が社会的な役割を果たすために

「科学は役に立つ」と聞くと、生活の利便性や技術的な発展を思い浮かべる人が多いかもしれません。しかし小松さんは、それだけではないと語ります。「宇宙の壮大さに心を動かされるように、科学には人を救う力があると思います。」科学を知ることで世界を新しい視点から見られるようになり、それが心の支えになる——そうした側面も、科学の大切な価値だといいます。

私はこれまで、特に天文学は日常生活との結びつきが見えにくく、「天文学が社会とどう関わっているのか」を説明するのは難しいと感じていました。しかし小松さんの話を聞いて、必ずしもそのように難しく考える必要はないのだと気づきました。宇宙の不思議や壮大さに触れ、多くの人がワクワクしたり心を動かされたりすること自体が、社会にとって重要な価値なのではないでしょうか。

また、近年は、科学への信頼が揺らいでいると小松さんは感じています。原子力発電やワクチンなどをめぐる情報には、誤解や不安も少なくありません。だからこそ「科学リテラシーを高めるためには、まず“科学って面白い！”と思ってもらうことが大事」と小松さんは強調します。多くの人が科学に親しみ、正しく理解することが、ゆくゆくは社会全体の科学への信頼回復につながる

考えています。

さらに小松さんは、「好奇心を持つことこそが、科学発展の原動力になる」と語ります。次世代に向けて科学を伝えることで、研究者を志す人材が生まれ、その人々がまたさまざまな形で科学を発信していく。こうした循環の中で、科学は世代を超えて受け継がれていきます。博士号を持つ人材は、この循環をより強固で持続的なものにする存在なのだと感じました。

このような循環の出発点にあるのは、難解な理論や専門的な議論ではなく、誰もが一度は経験するような「不思議だ」「面白い」と感じた学問に対する素朴な驚きなのではないのでしょうか。そうした体験が学びへの動機となり、研究や発信を通じて他者へと伝わることで、次の世代の好奇心へと受け継がれていく——私はこのような積み重ねこそが、科学を社会に根づかせてきたのだと考えます。

## 編集者になって、みえるもの

科学雑誌の編集者の仕事は、記事のテーマを考えるとところから、取材、原稿の執筆、編集、そして最終的な記事の出版に至るまで、多くの工程に関わります。では、そうした仕事を通じて見えてくる、編集者ならではの景色とはどのようなものなのでしょうか。「編集者という仕事でしか味わえないことは何ですか？」——そう尋ねると、小松さんは「多彩な分野の第一人者に直接取材し、その内容を記事として世に届けられることですね」と答えてくださいました。『Newton』の編集部では、取材対象は生物学・医学・宇宙科学など多岐にわたり、小松さん自身も専門である磁気圏に関する特集を企画・担当した経験があるそうです。自分の専門分野を誌面として世に出せたことは、大きな喜びだったといいます。こうした幅広い分野の研究者と直接対話し、最前線の知を吸収できること——それこそが科学雑誌の編集者ならではの魅力だと、小松さんは語ります。



た”という体験をきっかけに、科学に興味を持つ人が一人でも増えてほしい——そこには、小松さんをはじめとする『Newton』編集部の思いが込められています。小松さんの言葉の奥からは、科学を伝えることへの確かな情熱と、この仕事ならではの楽しさが伝わってきました。

さらに今、ニュートンプレスでは新しいウェブメディアの立ち上げを進めているといいます。小松さんは、そのプロジェクトマネージャーとして、さらに多くの人たちに科学の面白さを伝える基盤づくりに挑戦しています。

## おわりに

天文学という分野は「就職にはあまり役に立たない」と言われることもあります。しかし、私たち大学院生は日々、専門性を磨きながら、自分の研究内容を日本語・英語でわかりやすく伝える訓練を積んでいます。進捗報告やセミナー、国内外での研究会発表、観測・実験のためのプロポーザル（提案書）、研究継続のための申請書、そして最も重要な論文執筆——こうした経験の積み重ねを通して、私たちは自然と「伝える力」を養っているのではないのでしょうか。この総合的な力は、研究に没頭してきた博士号取得者にしかない強みだと感じます。

このように考えると、大学院生や研究者は、“ライター”であり“リポーター”でもあると言

えるでしょう。天文学が直接的には社会に役立ちにくく、就職面で不安を抱く方もいるかもしれませんが。しかし、小松さんが語ってくださったように、「社会には、研究者のように物事を正確に、わかりやすく伝えられる人が求められている」という言葉の通り、博士号を取得する過程で身につけた力そのものが、大きな武器になるはずです。

もちろん、自分の将来を見据えてアカデミア以外の可能性に視野を広げることは大切です。しかし、勉学や研究に情熱を注ぎ“一人の研究者”として没頭する時間の中にも、日々鍛えられている力があります。小松さんが「伝える力」を武器に編集者として活躍されているように、研究の中で自ら鍛えてきた力を活かすことで、新たな可能性が拓かれるのかもしれませんが。

## 謝 辞

お忙しい中、貴重なインタビューのお時間をいただき、写真を提供くださいました小松研吾さん、本稿の執筆機会をくださいました日本天文学会キャリア支援委員会の大工原一貴さん（ISAS/JAXA）、久世陸さん（京都大学）にお礼申し上げます。

## 参考文献

- [1] 天文学辞典「バンアレン帯」<https://astro-dic.jp/van-allen-radiation-belt/> (2026.3.9)